

会議録

○事務局 教育委員会教育部放課後対策課 電話：03(3981)1058

附属機関又は 会議体の名称	平成30年度 第2回 子どもスキップ運営協議会	
事務局（担当課）	教育委員会教育部放課後対策課	
開催日時	平成31年1月24日（木）午後3時30分～午後5時	
開催場所	区役所本庁舎8階 教育委員会室	
議題	1 開会 2 議題 (1)第1回子どもスキップ運営協議会で出された主な意見についての議論 (2)その他	
出席者	委員長	白熊千鶴子（豊島区青少年育成委員会連合会 副会長）
	委員	根岸幸子（豊島区青少年育成委員会連合会 第6地区常任幹事） 豊島佳代子（豊島区青少年育成委員会連合会 第2地区幹事） 三原真理子（豊島区青少年育成委員会連合会 第8地区幹事） 伊東博昭（高松小学校校長） 堀込広明（小学校PTA連合会副会長） 藤井芳子（駒込放課後子ども教室地域コーディネーター） 西野幸江（池袋本町小学校学校開放運営委員会委員長） 高田秀和（子ども家庭部長） 城山佳胤（教育委員会事務局教育部長） 副島由理（子ども家庭部子ども若者課長） 高桑光浩（教育委員会事務局放課後対策課長）
	事務局	高橋京子（子どもスキップ朋有所長） 斉藤英子（子どもスキップ目白所長） 桑原由貴子（放課後対策課 児童支援グループ係長） 早川裕太（放課後対策課係員）

1 開会

白熊委員長から開会の挨拶

2 放課後対策課長より資料1について説明

第1回子どもスキップ運営協議会で出された主な意見より、「1 保護者の児童へのしつけと学校及び子どもスキップでの指導について」の議論

以下経過

○A委員

(問題になっている暴言の度合いについて) 子どもスキップの職員の方の人格的な、尊厳問題に関わるくらいの暴言のような印象を受け、職場環境としても良くないのではないかと。職員がしつけとして叱ってはいけないということはないと思う。その辺は臨機応変にやってもらえるよう、上の方からも通達していただきたい。

○B委員

保護者の方も最近は自信を持っている方が多いため、職員の方々の資質をもう少し上げないと結局太刀打ちできないというような現状がある。臨時職員の方、若い職員は言葉遣いもお兄さん感覚で、そういう方々がお母さん方と話すのはすごく難しい。お母さんも自分の子供の不安なことについてよく職員の方にご相談しているが、皆さん満足していないようだ。こういったことに対応していくというのは難しいことなので、職員の資質向上のために研修が必要ではないか。

○C委員

職員の方はそういうこともあるかもしれないですけど、保護者の方にも、子供のしつけとか怒らなくてはいけないところを怒らないところがあると思う。

○D委員

保護者が大分若くなり、日頃から自分の考えと価値観が少し違うと感じる。学校の先生方が大変なのは、そういうところではないか。価値観が違うために、同じことを話しても、本人には全く別の物のように映ってしまう。

日頃から先生方、子どもスキップの所長方以下またスタッフの苦労はひしひしと感じる。ただ、私自身は学校と子どもスキップの子供の顔が違うということは、裏を返すと、とてもいいことだと考えている。

もしかすると自由に暴言を吐くのが、実はこの子の一番の本音かもしれないと思うときがある。けれども、一番自分を出しているときをチェックして、キャッチしないと、自分のつらいところも見つけてくれる人がいなくなるのではないかと。だから、それを見つけれられるのが実は子どもスキップなのかもしれない。ただ、道徳的に大人の人に対する言葉づかいや、一緒に遊んでいる友達への配慮とかはそういうものとはまた別の問題である。怒られてい

ることの意味が理解出来るのはたった今ではないということ、それをやはり親御さんも、また、言われる本人たちもわかっていかないといけないのではないか。

私はひるまずに頑張っって子どもスキップの皆さんはきちんと言うべきことは言ってほしいなと思っている。それは必ず子供の将来に関わってくるし、結果は表れてくると思う。

○E委員

子供の姿はやはりスキップと学校では全然違うと思うが、だからといって学校と子どもスキップが全然連携していないわけではない。そのあたりは子供たちも使い分けている部分もあるように思う。

子供たちは子どもスキップで遊ぶことを楽しみにしているようで、うまく使い分けられるように大人が知恵を絞って子供たちのために何かできることがあればいい。

○委員長

今は（子どもスキップが）教育委員会に入って変わり、学校、教育関係ということで、子供たちにとってどれがいいか悪いかというのは脇に置いて、ある程度はしつけというか厳しく指導するという面も入ってきていると思う。

○子どもスキップ朋有 所長

今の子供たちは、学校で多少いい子で、家でも多少いい子で、多少なりともストレスを感じていると思う。子どもスキップで自由に暴言までではないけれども、ある程度ストレスのはけ口のような形で受け止めていかないとやっていけないのではないかと感じる。やはり暴言を吐くお子さんは、いろいろ問題を抱えているケースが多い。

また、学校ではここまで言ってないのではないかと感じる。でも、学校の先生がいるときにポロッと行ってしまい、学校の先生が「え？今うるせえなあって言った？」みたいなときは「ああそうですよ」という感じで、先生が、子どもスキップに用事があって来てくれたときには、「あっ、先生」と反応するので、やはり学校と子どもスキップでは違うなと感じることはある。

保護者の質というところでは、高学歴で確かに色んなことを突っ込んで、言ってくる。でもそういう時はやはり大事で、所長の私がきちんと答える。多分100%自分が満足できる答えが返ってこなければ、次の人にまた相談していくのだと思う。

子どもスキップは小さい1年生の時からずっと見てきたので、全員が受け止めつつ、職員の尊厳の問題になってしまうくらい「ばばあ」と言われたり、「てめえの話なんか聞きたくなえよ」ということは結構言ったりする子もいる。それに負けないように職員もちゃんとして、聞き入れなくても注意をする。毎日言われるからといって知らないふりをしない、というような指導はしている。

○子どもスキップ目白 所長

やはり色々暴言吐くというのは、1年生2年生くらいで暴言を吐くことで自分を強く見せる、そういうアピールもあると思う。ただ、暴言を吐いたことで強く見えるということはないので、そうではなく、言葉も時によっては武器になる、言われたことで嫌な気持ちにな

ると子供たちには話をしている。子供たちはわかってほしいという気持ちが強いので、そこでまず、受け止めてあげて、それから次に進もうと職員に話をしている。

子供たちは、とても疲れて帰ってくる。「ちょっと休んだ後に宿題やろう」というような声をかけたり、宿題も難しくてなかなか終わらない時には、「それならおやつ食べたらもう一回頑張ろうか」と、そういうことで子供たちがある意味子どもスキップでホッとできる、子どもスキップだったらホッとできる、自分を抑えている部分が出せる場所になってほしいということは職員とも話をしている。若い職員もおり、私たちが勉強しなくてはいけなし、職員会議で子供のことを話し合い、若い職員に研修に率先して出てもらい、その後受けてきてどうだったか、そういうことを職場内で共有している。若い職員はお母さんと話をするのはいいけれども、相談となったらわからないことがたくさんあると思うので、即答するのではなくて、ちゃんと考えて答える、他の人に引き継ぐということを徹底している。

最後に、教育委員会に入って良かったことの1つとして学校との関係がさらに密になり、目白小学校の場合は1週間に1回、火曜日に生活指導部会ということで私も必ず出席することにし情報交換等を行っている。

○委員長

以前は相談内容に関して、もちろん職員と、臨時職員にもある程度ここは共有しようという話があった。しかし、今は職員と所長だけで臨時職員には回ってこなくなってしまったことには疑問を感じる。大切な情報に関しては、ある程度は臨時職員にも必要な情報ではないかと思っている。

○放課後対策課 児童支援グループ係長

お子さんにしても、保護者にしても、やはりわかってもらいたい、受け止めてもらいたい、認めてほしいということなのではないか。そこで、子どもスキップが最も身近な相談窓口ということで、時間がかかるけれども、とことん受け止めて、話を聞いて、わかってもらえたと感じてもらうことが大事である。受け止めてもらい、承認されたということが大事で、ある程度学校では緊張したところで精一杯頑張っているのだから、子どもスキップではありのままの素の部分が出てきて当然だと思う。暴言を吐いたり、乱暴だったり態度が悪かったりすることはあるとは思いますが、それをひっくるめてまず受け止めて、やってはいけないことはそれなりに諭していきながら、関係を作っていくことが大事なのではないか。また、ご指摘にあったとおり、臨時職員も含めての職員の研修を実施すること、福祉の専門家として、こういう相談があったときには、こういうところに結び付けていくというような最低限のことは臨時職員も頭に入れながらやっていく、本当に大切なことは所長さんに引き継ぐとか、やはりそういったところは研修で徹底すべきと、改めて考えた。

○子ども若者課長

今日のテーマである学校と子どもスキップでの態度の違いというのは、何十年も前から議論されている。

学校では緊張しながらもしっかりやっている。そして、子どもスキップに帰って来たとき

に、ちょっとホッとした自分がいて、そこでわがままを言って納得してもらう、それが彼らの心のよりどころになっているのかなと思う。ただし、その自分の出し方には、ルールがあって、マナーがあるのでそこについては相手を傷つけること、他人を不快にすることはきちんと諭していくことが必要であり、押しえつけるのではなく、自分から理解するようにもっていくというように、プロセスが非常に大切なように思う。親御さんも私たちも同様に未熟な部分があるので、そこは人間と人間が付き合う中で、なんとかわかりあうことが出来ればいい。子ども若者課には、子ども若者支援ワーカーがおり、「このお母さんは申請書を書きたいけれども書けない」というような問題について相談に乗れるので、ぜひご一報いただければと思う。そういったお母さんの問題についても、つないでいただければ子ども家庭支援センターだったり、保健所だったり連携出来るので、情報を漏らすわけではなく、職員同士の関係の中で、きちんと対応していきたいと思うのでご利用いただければと思う。

○A委員

現場というか、事務局の方々の声を聞きまして非常に安心した。これが全子どもスキップに拡散していくということなので非常に嬉しい。

○E委員

先ほど学校ではいい子で、子どもスキップではちょっとタガが外れるような感覚というお話があったが、そのようにとらえるとすごく楽だが、実際はそうではなくて、やはり色々顔を持っていて、学校で見せる顔も本当だし、子どもスキップで見せる顔もそうだし、家庭で見せる顔もあると思う。だからこそ、それぞれの良さがあって、そこで見せるところの子供の良さに、あるいは困っていることに大人が気付いてあげて、援助の手を差し伸べてあげればいいのではないか。子どもスキップも学校と同じような顔を見せていたら、何の変わりもないことで逆にそちらの方が私は怖いと思うし、子供はそういうものだと思ってしまうこともやはり怖いと思う。そちらのほうが簡単ではあるが。学校ではしっかりしていない子が子どもスキップではレゴか何かで一生懸命遊んだりすることもあったりもするので、こういう好きなことは真面目にやるところが見ることが出来るので私はそういうのでいいかなと思う。

○委員長

私もそれでいいかと思う。

○B委員

E委員のおっしゃる通りで、納得した。実際、子どもスキップですごくいい子もいる。家庭でいい時もあり、少し暴れるときもあり、学校でもやはりそういうときがあり、子どもスキップでもいい面も悪い面もある。

○C委員

今の子供たちは色々なことがあり、どこへ行っても緊張しているところがあると思う。今日お話を伺っていて、子どもスキップに来るとちょっと息抜きができるというところがあるとわかった。

○D委員

来賓として校舎内を歩いている際も、子どもスキップの所長は飛び抜けて子供に人気があるというのは、信頼の問題もあると思う。施設や組織の中でやっているというよりも、人と人が付き合っていく中で、子どもスキップという環境の違うところを体験し、中学生になるとまた少し落ち着きが出るような、うまい具合に成長の過程にステップがあるのかなと、羨ましく思っている。所長、非常勤職員、臨時職員というが自信を持ってやるのが一番かと思うので、今後もよろしくお願ひしたい。

○委員長

保護者のお願いで、「この宿題はどんなことあってもさせてください」や、「塾の宿題を全部するように」とお願い事をされている。

○子どもスキップ 所長

宿題については、声はかけるけれども、あくまで自主的にという形をとっている。やるのはお子さんなので、一応声はかけてやらせるというスタンスでいる。でもノートに最近やってこないで一声かけてくださいというのあっても、ひと声かける。「お母さん怒っているよ」と言って。そうするとその日はちゃんとやったりする。

○教育部長

私は、放課後は、子供の遊びは子供同士がメインで、職員や大人は緩やかな見守りで、介入すべきところは介入するけれども、極力見守って育てるのがいいと理解している。これが今日の状態でいいのかというのが今日の論題だったのかと思っている。

私は、個人的な意見として、子どもスキップの職員も皆先生と呼ぶのがいいのではないかとと思っている。子どもスキップの職員のモラルを上げる、モチベーションを上げるためには、それにふさわしい呼称がないと、その呼称の差っていうものが、職員に暴言を吐いていいと考える理由の一つになってしまっているのではないかと。もう少し職員に権威を与える。それが今後の課題になるのではないかと。

○委員長

最初に1年生で入ってきた頃は、全員先生と呼んでいたのがそのうち個人名になったり、もうちょっと悪くなると「ばばあ」になったりする。「ばばあ」と言われた人間は訂正しづらいので、それを聞いていた他の職員が「今のおかしくない?」、「嫌な気持ちしない?」、「謝った方がいいんじゃない?」と言う。他の職員が言われていたら、また別の職員が声をかけるというように持ち回りで話をしている。

○子ども家庭部長

今日の議題について、私が考えたのは、学童保育における保育の質というのは何なのかということである。子ども家庭部は保育園を抱えていて、実際に保育の質ガイドラインというのを策定しているが、その中で、環境面、内容面、人材育成面の3つの質を考えている。その3つを考えて、学童保育の質とは何なのかというところで、国では学童指導における人材育成について、まだまだ議論されていない。皆さんの話を聞いていて、保育園では子供の自

自主性、自分で考える力を育もうとしていて、学校の方もその方向で教育指導要領も変わっているとは思いますが、なかなか学校の先生も忙しくて過渡期にあると思う。子供の自主性を育もうと言いつつも、ある程度集団教育をしなければならず、学習指導要領もあり、ある程度は画一的にやらなければいけないところがある。学童保育というのはその保育園と学校の中間的な存在の中にあり、どのようにして自主性を育てていくのかという部分で非常に重要な場だと考えている。子どもたちが学校で見せない顔を学童の中で見せるためにはどのようにすれば良いか。子供たちや保護者の教育をしていくというのは、難しい専門性が要求される仕事だと思う。だから、学童の先生方、それに携わる方の保育の質を向上させるために、もっと人材育成していかなければいけない。学童における保育の質についてのガイドラインというものをもっと議論をしていく必要があると思っている。どのように子どもの自主性を育てていくかということについて、非常に専門的な能力が実は学童の先生方には必要で、そういう議論をしていくことによって、子供の自主性を育てていく、親に対してもある意味親教育をしていく、それが今後の学童にとって良い方向になっていくのではないかと思う。

○放課後対策課長

非常勤職員は募集しても常に足りない状況である。おそらく以前から子どもスキップに関わっている人から見れば、職員の質も下がっているように感じる人がいるかもしれないが、そういう状況なので、先ほど保育の質の話もあったが、今日来ていただいている所長のような対応がどの施設でも出来ればそういうこともないが、そうではないところでは、なかなか厳しい状況が現実として出てきてしまっている。子どもスキップにちゃんとやってください、指導してくださいとおっしゃる校長先生も結構いらっしゃる。なので、子どもスキップでは先生と呼ばせたらどうかという校長先生もいらっしゃる。職員の研修も含めて、質の向上と、子どもスキップは学校とは違うということを前提にどのように受け止めるかということを考えていくことが大事であると考えている。

○A委員

今後子どもスキップにおいては色々と研修を行い、どういう対応をしていくかを全ての所長に浸透させていただきたいと思う。

○E委員

子どもスキップの運営の難しさはそれぞれだと思うが、それをどこまで、誰が緩和してあげられるかというところだと思う。子どもスキップの職員はたしかに先生と呼ばれていないが、彼らは子供との距離を近づけるためにあだ名と呼ばれるように、名札にそれが書いてあり、そこが先生となったらどうなるのかと考えたが、こういうことで序列が子供なりに作られていくのかと思って聞いていた。

○B委員

保護者の方に、感謝の気持ちを持ってもらいたいというところが一番大きい。7時まで預かってもらう、5時まで預かってもらうというのは当然ではなくて感謝を感じるようなそう

いう指導というのは出来ないのか。どんどんサービスが良くなるとそれが当然になってしまふ。ここまで安心安全で見えてくれてありがたいという感謝が、どうしたら生まれるのかなということが気になっている。

○委員長

永遠の課題かもしれない。

○C委員

私は先ほど1年生の時にはちゃんと先生と言っているけれどという話があって、一貫して1年生の時からここでは先生と呼びましょうというようにしていけば、その子が6年生になるまで先生と呼ぶと思うので、最初が肝心ではないかと思う。

○委員長

放課後子ども教室で手作りなどを教えてくれる方には、ちゃんと子供たちには先生と呼ぶように言っている。

○D委員

課長が言ったように、のどから手が出るほど人が欲しいという状況の中での採用なので、結局、資質はともかく、誰か来てくれという、それが現実なのかなと思ってしまう。なので、定期的に指導者の育成もすべきではないか。

○委員長

様々な問題提起があった。学童保育の質、職員の問題について、少しずつ向上していく、高めていくことが必要だと思う。とにかく人が足りないのは事実で、何かと言うと誰かいないかという話が出てきているが、どうしてこんなに人気がないのだろうか。

○子どもスキップ朋有 所長

やはり非常勤職員という肩書が正規職員と比較して、金額と時間には見合っているかもしれないが、もっと欲しいというところもあり、それは放課後児童支援員研修を受けて、子ども若者課の研修もちゃんと受けて、みんなで共有しながら質を高めていく努力はすごくしている。けれども、子供の人数と職員の人数が、現在は合っていない。それでも、職員がいなくてもイベントを頑張っているのだから、指導員をほめて、自分たちの中でもほめあっている。質の向上は、これからも皆努力していくが、現状でも努力をしている。育てるとするのはやはり難しいところはある。

○委員長

区としては、臨時職員や非常勤職員については正規職員へと移行するっていう考えはあるのか。

○放課後対策課長

現在は、所長1人または施設によっては所長ともう一人正規職員という形で正規職員を配置しており、他の職員は非常勤職員または臨時職員である。これからどんどん正規を増やしていくことは難しいと考えている。

○教育部長

皆本格的な職務、専門的な職務に従事している。ただ身分が違う。

○放課後対策課 児童支援グループ係長

保育士の資格を持っている人材が売り手市場になっているので、取り合いになっている。臨時職員の中でも一定の要件を満たしていれば、どんどん放課後児童支援員研修に送り込んでいる。そして、資格を取得して、非常勤職員に応募することが出来るため、臨時職員で長年経験を積み、放課後児童支援員研修を受け、実際職員になっている。

○委員長

あまりにも人手不足で、何か人が集まるいい方法を、区としても考えていただきたい。

ちょうど時間になりましたが、部長は付け加えることはありますか。

○教育部長

ぜひ、「先生」と呼ぶ運動に参加していただければと思う。

○A委員

今日の教育部長の「先生」と呼ぶというところの話は非常に印象に残り、お金や身分の問題など色々あるが、やはり働く人の意識、ミッションを感じているかどうかについて、上の方からそういうことを言っていただければ、使命感が生まれると思うので、ぜひその運動があるということだけでも伝えていただければと思う。

3 閉会